

貿易史研究から見たオランダ史料

石田千尋

はじめに

日蘭貿易史の研究は、近年、近世初期・中期に関して着々と研究が進みつつあるが、後期、特にオランダ東インド会社崩壊後については十分にされてきているとはいえない。日蘭貿易における取引の過程で作成された各種の日本側・オランダ側史料は照合されることでより実証力を増し、新たな発見も生まれる。日蘭貿易において取引されたオランダ船の輸入品に関しては、日蘭両史料の照合・調査・研究が文献史料上、第一に考えられる基礎的研究である。しかし、近世後期、特に19世紀に入ってからオランダ側の取引史料と日本側の取引史料はそれぞれに特色のある複雑な構造をもつ史料群のため、その詳細はほとんど解明されないうえに、さらに、貿易品に関する研究である以上、輸入された物そのものの調査は重要な基礎的作業であるが、輸入品その物は、従来、美術工芸史等の研究分野となり、文献を扱う者の対象になりにくい面をもってきた。ところが、例えば染織品についてみると、東京国立博物館をはじめとして、各所にオランダ船の輸入反物の裂を、その名称をともなって貼り込んだ「反物切本帳」⁽¹⁾が意外に多く所蔵されており、輸入染織品については本史料を用いて物の面からも調査・研究が可能であることがわかる。

本報告では、考察年代を近世後期におき、まず、天保2年(1831)を事例に、日蘭の貿易取引、特に輸入品をめぐるオランダ史料と日本史料との照合を提示・考察し、次に、文政4年(1821)を事例に、日蘭両文献史料と物史料(「反物切本帳」)との照合を通して、取引された輸入染織品の実態を明らかにし、日蘭貿易史研究にとってオランダ史料が果たす役割について考えてみたい。

1. オランダ船輸入品に関するオランダ史料と日本史料との照合

オランダ船が持ち渡った品々は、貨物を船積みして送付する際、貨物の受取人に宛てて作成された積荷明細目録である *Factuur* 「送り状」によって知ることができる。「送り状」は出島のカピタン部屋において商館長から年番町年寄に提出され、阿蘭陀通詞をまじえて翻訳されるわけであるが、提出されたものは入港船が持ち渡った「送り状」ではなく、商館長が前もって日本側に知られないように元値を抜かして写し取った送り状のコピー、すなわち *Opgegevene Factuur* (提出送り状)であった。したがって、2艘入港の年は2種類の「送り状」から「提出送り状」が作成され、品目名が簡略化されたり、数量も少なく記されたりした。

一例として、天保2年(1831)時の *Factuur* 「送り状」と *Opgegevene Factuur* 「提出送り状」

を突き合わせると表1の㉔㉕のようなになる。「積荷目録」では、この年78品目におよぶが、表1ではその内の4品目を示した)この年はオランダ船が2艘(Drie Maria's, Jonge Jan)入津し2艘の持ち渡った「送り状」記載の品々が㉔では合計されていることがわかる。(図1・2・3参照)しかし、㉔「提出送り状」における(1) groote Patnasche sitsen、(2) kleine Patnasche sitsenの産地は、この表記では、インドのパトナのものと考えられてしまう。ところが、㉔「送り状」には、(1) groote Europische Patnasche chitzen、(2) klein Europische Patnasche chitzenとあり、ヨーロッパ産であることを明記しており、パトナ更紗の模造品であることがわかる。同様に、㉕における(3) sitsen、(4) taffachelassenの表記では本来の産地であるインド産と考えられるが、㉔「送り状」によってEuropischeすなわちヨーロッパ産(模造品)であることがわかる。また、(4)の㉔「送り状」での数量合計は2,100 stukken(反)であるが、㉕「提出送り状」では、1,840 stukken(反)と少なく提出されていることがわかるのである。

㉕「提出送り状」が翻訳されたものが、㉔「積荷目録」である。(図4参照)「提出送り状」の表記に従って(1)(2)は「辨柄皿紗」、(3)は「皿紗」、(4)は「奥縞」と訳されていることがわかる。日本側史料の「積荷目録」だけではこれらの反物はインド産ということになり、実際の輸出品と違った情報を提供してしまうことになる。したがって、㉔㉕㉖を照合することによって、各品目の原語と訳語、数量の異同を知ることができるわけであり、日本側の「積荷目録」だけでは、実質的な積荷の種類・数量は把握できず、オランダ側の史料、特に㉔「送り状」と照合することによってその実態が解明されていくのである。

2. 輸入染織品に関する日蘭文献史料と物史料との照合

ここでは、オランダ船輸入染織品の内、特に更紗を事例に文政4年(1821)の日蘭文献史料と物(裂)史料との照合をおこない、この年の更紗輸入の実態を解明するとともに、オランダ史料の役割について考えてみたい。

異国的な花鳥・人物・幾何学文様等、種々さまざまな模様を色鮮やかに主として木綿布に染めた更紗は、本来インドを原産地とするものである。しかし、日蘭貿易においては、文化10年(1813)からヨーロッパ産の更紗が持ち渡られはじめ、文政期(1818~1830)にはその輸入がインド産の更紗からヨーロッパ産の更紗へと転換した。⁽²⁾表2は文政4年(1821)の更紗輸入に関して日蘭両史料を照合して作成したものである。この内、インド更紗であるPatnasche chitzen(パトナの更紗)・Misaporische chitsen(ミルザプールの更紗)はベンガルから積み出された更紗である。Patnasche chitzenはパトナで仕入れた更紗であり、当時、日本側ではこれを「式番皿紗」と訳している。現存する反物の見本帳である「反物切本帳」をみると、「式番皿紗」は決して上質な更紗ではなく、いわゆる鬼手と呼ばれる粗い木綿地にインド茜特有の濃い赤と黒で小花や幾何学文様を染めたものである。(図11E参照)こうした茜と黒の二色の更紗は今日でも量産を目的としたインド更紗にしばしば見うけられる。インド更紗の場合、藍は浸染をたてまえとしており、藍染を施すということは藍に染める以外の部分をすべて蠟で覆うという厄介な工程が必要とされる。そのため早く簡単に製作されるものとしてこの藍染を省略したこのような更紗がつくられるのである。⁽³⁾

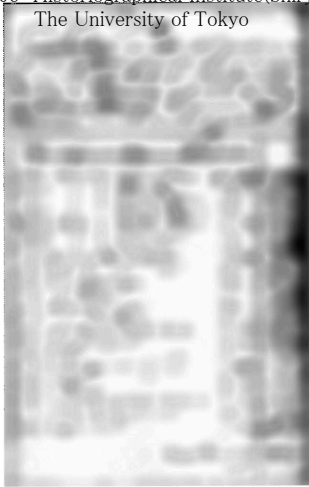


図1 ドゥリ・マリアス号の「送り状」

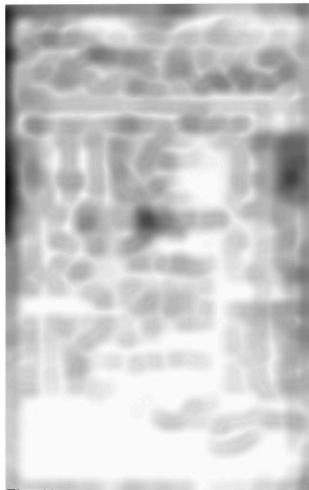


図2 ヨング・ヤン号の「送り状」

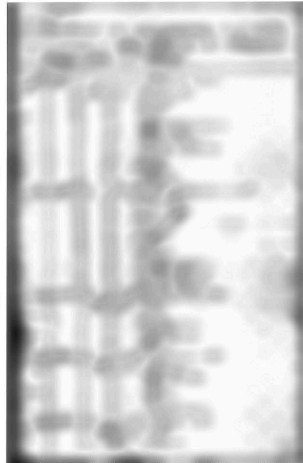


図3 「提出送り状」

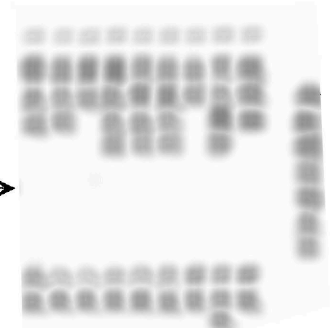


図4 「積荷目録」

表1 天保2年(1831)オランダ船2艘(Drie Maria's, Jonge Jan)本方荷物

	㊤ Factuur		㊦ Opgegevene Factuur			㊧ 積荷目録	
	Goederen	Hoeveelheid	Goederen	Hoeveelheid	換算	商品	数量
(1)	(D) groote Europische Patnasche chitsen	350 stukken	groote Patnasche sitsen	350 stukken	350反	辨柄皿紗	350反
(2)	(D) klein Europische Patnasche chitsen	400 stukken	kleine Patnasche sitsen	3,400 stukken	3,400反	同	3,400反
	(J) Europische Patnasche chitsen	3,000 stukken					
(3)	(D) Europische chitsen	50 stukken	sitsen	150 stukken	150反	皿 紗	150反
	(J) Europische chitsen	100 stukken					
(4)	(D) Europische tavachelassen	800 stukken	taffachelassen	1,840 stukken	1,840反	奥 綿	1,840反
	(J) Europische tavachelassen	1,300 stukken					

註・(D)はDrie Maria's号の積荷、(J)はJonge Jan号の積荷を示す。

・㊤ Factuurおよび㊦ Opgegevene Factuurは、[Japan Portefeuille № 29. 1831]

MS. N. A. Japans Archief, nr. 1452 (K. A. 11805). (Tōdai-Shiryō Microfilm: 6998-1-82, 83)。 (図1・2・3参照)

・㊧ 積荷目録は「両船積荷物差出」(「崎陽齋来目録」一、早稲田大学図書館所蔵)。 (図4参照)

Misaporische chitsen の Misaporische はインド北東の「ミルザプール Mirzapur の」の意味であり、ミルザプールで仕入れた更紗をいう。日本側はこの更紗を文政3年(1820)、文政4年(1821)に「弁柄皿紗」と訳しているが、文政8年(1825)には「メリサポース皿紗」、文政10年(1827)には「メリサホノリス」と原語をそのままあてている。また、この更紗はオランダ側の帳簿上、インド更紗として Patnasche chitzen 「忒番皿紗」と同じ扱いとして処理されることが多い。確かに「反物切本帳」をみると Patnasche chitzen と Mirsaporische chitzen を区別することは非常に難しく、文政12年(1829)などにはオランダ側の帳簿に Mirsaporische chitzen は日本の反物目利によって Patnasche chitzen として分類されたと記している。

なお、オランダ側の帳簿により、文政4年(1821)輸入の「忒番皿紗」「弁柄皿紗」は1反2.9~1.9テールで日本側に販売されていることがわかる。(表2参照)

ヨーロッパ製の更紗には文政期の「反物切本帳」をみる限り、木版・銅版などによる各種多彩なものがあり、そこには日本で俗に「ロシア更紗」と呼んでいる鮮やかな赤地の更紗も多く含まれている。Factuur「送り状」により文政期には、今までになくヨーロッパ更紗が多量に輸入されていることがわかる。この頃、オランダでは更紗が盛んに生産されていた。オランダ北部のハーレム・ライデン・アムステルダム・クラリンゲンなどにはプリント・染色企業があり、特にアムステルダム近郊のオフェルトームでは日本向けのベンガル更紗・パトナ更紗の模造プリントが手作業で製造されていた。また、オランダ南部ゲント(現ベルギー領)の近代的工場でも模造更紗が造られ、⁽⁴⁾1825年(文政8)に、同地のスメット商会在産業展覧会でインドネシアと日本市場向けのプリント更紗を展示したりしており、輸出用の更紗がつくられていた例証といえよう。⁽⁵⁾

Europische chitzen は日本で「本国皿紗」と訳されヨーロッパ独自の意匠によって、アリザリンレッドやクロムイエローのようなあざやかな色彩を用いた花柄や幾何学文様等のプリント更紗である。(図10参照)文政4年(1821)のオランダ側史料をみると、この年、Europische chitzen 「本国皿紗」は400反輸入され、1級品32反は1反32テール、2級品19反は1反24テール、3級品の内、142反は1反21.2テール、137反は1反15テールでそれぞれ販売されている。(表2参照)先にみたインド更紗に比べて格段の高値で売られている。これはインド更紗と違い、生地が密で染色がきわだってあざやかなプリント更紗であったためといえよう。この年、残りの70反は翌年文政5年(1822)に64反献上進物品として使用され、6反は1反21テールで江戸参府の行程で販売されている。

更紗は先に述べたように、本来インドで生まれた染色と考えられる。その更紗とその技法がヨーロッパに伝わり、ヨーロッパで更紗がつくられるようになった。したがって、ヨーロッパ更紗は全てインド更紗の模倣ということができよう。そして、輸入品の中で、特に意匠において模倣の代表的なものとして Patnasche chitzen in Europa nagemaakt (ヨーロッパで模造されたパトナの更紗)が挙げられる。これは、先にみたパトナ更紗の模造品であり、藍抜きの二色更紗をわざわざ真似て上質の木綿にプリントされた二色更紗である。(図11D参照)文政4年(1821)の日本側史料「積荷目録」をみると、この Patnasche chitzen in Europa nagemaakt は「本国新皿紗」と訳されている。オランダ側史料上、この年にはじめて Patnasche chitzen in Europa nagemaakt が登場する。したがって、日本側でも新品种の更紗として「新」をつけたのであろう。後にこの

表2 文政4年(1821)の更紗輸入

符号	品名		販売反数	販売価格	反物の長さ と幅	長1丈幅1尺 当りの単価
	反物切本帳	見帳・オランダ史料・積荷目録				
A※	[ヨーロッパ更紗] 老番尺長上更紗	老番尺長上血紗 Europische chitzen 1 ^o soort 「本国血紗」	32反	32テール	(長)11丈6尺 (幅)2尺9寸 2尺8寸5分	0.96テール
	B 式番同	式番同 Europische chitzen 2 ^o soort 「本国血紗」	19反	24テール	(長)8丈9尺 (幅)2尺8寸5分 2尺9寸5分	0.93テール
	C い三番尺長上更紗	い三番尺長上血紗 Europische chitzen 3 ^o soort 「本国血紗」	142反	21.2テール	(長)7丈6尺 (幅)2尺8寸 2尺8寸5分	0.99テール
	ー ろ三番尺長上更紗	ろ三番同 Europische chitzen 3 ^o soort 「本国血紗」	137反	15テール	(長)6丈8尺 (幅)2尺7寸5分 2尺8寸	0.79テール
	D い更紗	い血紗 Patnasche chitzen in Europa nagemaakte 「本国新血紗」	350反	2.3テール	(長)1丈3尺5寸 (幅)3尺2寸5分	0.52テール
ー	[インド更紗] ー	ろ同 Patnasche chitzen 「式番血紗」	182反	2.9テール	(長)2丈7尺 (幅)3尺 3尺1寸	0.35テール
	E は更紗	は同 Patnasche chitzen 「式番血紗」 Misaporische chitsen 「弁柄血紗」	4,461反	1.9テール	(長)1丈7尺 (幅)2尺9寸	0.39テール

註：1テール=10匁(銀)

出典・反物切本帳～「文政四年 巳七月 巳紅毛船持渡反物切本帳 芦塚太郎八」(東京国立博物館所蔵)。(図10・11参照)

・見帳～「巳五番割 巳八月 巳阿蘭陀船本方見帳 村藤」(長崎県立長崎図書館所蔵)。(図9参照)

・積荷目録～「[文政四年 阿蘭陀船積荷リスト]」「紅毛船年々荷物書並ニ風説書等品々」金沢市立図書館所蔵加越能文庫。(図6参照)

・オランダ史料～Factuur 1821。(図5参照) Pakhuis of Goederenboek voor het jaar 1821。(図7参照) Rekening Courantboek voor het jaar 1821。(図8参照) [Japan Portefeuille №19. 1821] MS. N. A. Japans Archief, nr. 1442 (K. A. 11794)。 (Tōdai-Shiryō Microfilm:6998-1-74, 75)。



図5 1821年フォルティチュード号の「送り状」

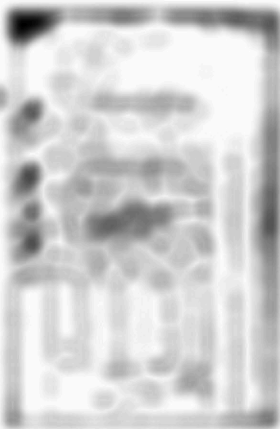


図6 文政4年の「積荷目録」

※印は Europische chitzen (本国血紗、尺長上更紗) に関する記事。



図7 1821年の「総商品出入帳」



図8 1821年の「日本商館勘定帳」

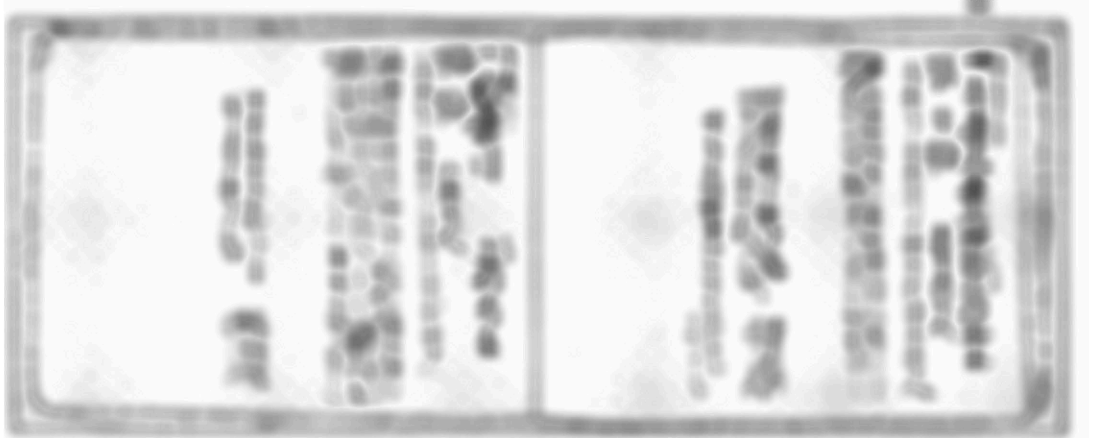


図9 文政4年の「見帳」

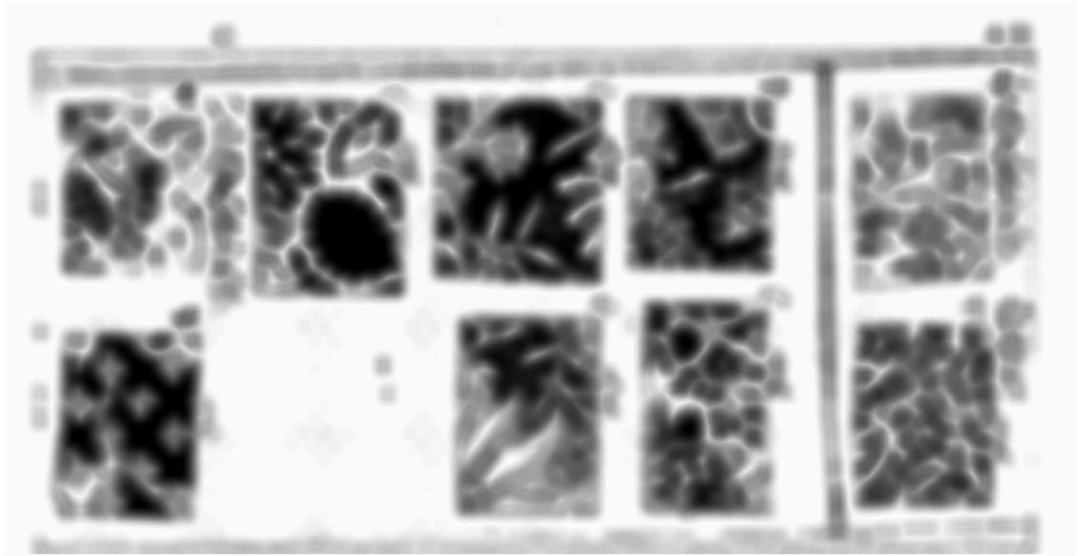


図10 ヨーロッパ更紗 (A・B・C)

B

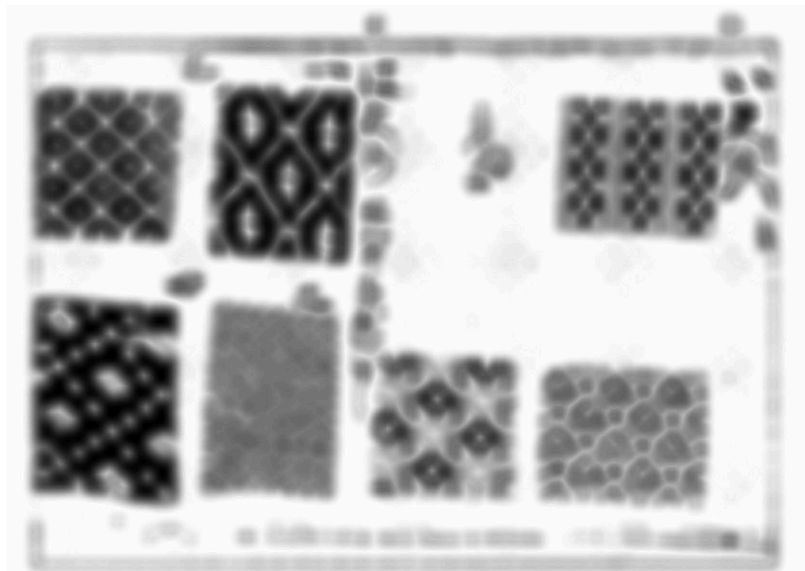


図11 インド更紗 (E)・ヨーロッパ製インド更紗の模造品 (D)

更紗は「本国式番皿紗」・「本国皿紗」・「弁柄皿紗」・「尺長皿紗」・「皿紗」などと訳されている。オランダ側史料より、この年、350反が輸入され、すべて1反2.3テールで販売されていることがわかる。(表2参照) Europäische chitzen に比べて非常に安く、先にみたインド更紗に近い価格で取引されている。文政期を通じて、オランダ側史料により、ヨーロッパ更紗の半分以上はこの模造パトナ更紗であったことがわかる。

文政期輸入のインド更紗とヨーロッパ更紗の日本側への販売単価を、オランダ史料によって比較してみると、インド更紗1反に付き、2.9～0.8テールに対して、ヨーロッパ更紗 (Europäische chitzen) は32～9.6テールであり、先に述べたように、ヨーロッパ更紗がインド更紗に比べて高価な商品として取り扱われていることがわかる。それに対して、模造更紗の Patnasche chitzen in

Europa nagmaakt は 1 反2.3~1.7テールであり、単価が非常に低い。しかし、インド更紗とヨーロッパ更紗および模造更紗は反物の大きさ（寸法）に違いがあり、実は単純に 1 反の単価で比較することができないことをここで断っておかなければならない。文政 4 年（1821）を例に日本側商人作成の取引史料である「見帳」⁽⁶⁾（図 9 参照）に記された反物の長さ（幅）を基に長さ 1 丈・幅 1 尺あたりの単価を出すと表 2 の「長 1 丈幅 1 尺当りの単価」のようになり、ヨーロッパ更紗はインド更紗の 2.7~2.1 倍、模造パトナ更紗は 1.4 倍となる。先述程の差ではないにしろ、ヨーロッパ更紗がインド更紗に比べて 2 倍以上の高値で販売され、模造パトナ更紗は高値ではあるが、ヨーロッパ更紗に比べれば低価格で売られていたことがわかる。

このように、文政 4 年の更紗輸入という事例についてみても、オランダ史料は輸入更紗の産地・等級・輸入量・日本への販売数・販売価格等々の情報を提供しており、日本側史料だけでは輸入更紗の取引の実態を十分に考察することができないのである。（図 5・7・8 参照）

ところで、上記の分析結果から、何故ヨーロッパ、オランダにおいて、模造パトナ更紗など更紗の模造がつくれ、低価格で持ち渡られなければならなかったのか、という疑問がわいてくる。インドで製造された更紗に対する憧れのあらわれということも推測されるが、オランダにとってはそればかりではなく、政治・経済的に差し迫った理由が存在していたと考えられる。

18 世紀中葉（1757 年 プラッシーの戦い）から 19 世紀中葉（1857 年 セポイの乱）にかけてのイギリス東インド会社のインド支配によって、オランダはその市場をイギリスに奪われ、物資を獲得することが困難な状況にあった。一方、イギリスはインドでの貿易収入と租税収入を本国へ移動し、その投資によって産業革命を推進させる一要素となっていた。イギリスではこの産業革命の技術革新によって紡績技術が飛躍的に進歩し、綿業が発達していた。19 世紀前半にこのイギリス綿業は世界市場へと進出し、インドにおける都市工業の上質綿布は直接打撃を受けて没落していった。その結果、インドにおける綿布の生産は地方の諸都市や村落での粗布の手織りとなり、必然的に品質の悪化を生じてしまったのである。⁽⁷⁾ 現存する「反物切本帳」に貼り込まれているインド更紗の粗末な織りと染めはそれを語っている。このような状況下で、オランダは輸出品となる更紗を自国生産、もしくはヨーロッパ通商圏内での購入に切り替えていったのであろう。このように、更紗の模造が生まれる理由として、イギリスのインド支配を起点とする一連の現象を考察することができるのである。そして、日本の文政期には先に述べたように、オランダ船の更紗輸入はインド更紗からヨーロッパ更紗へと転換していったのである。

おわりに

近世後期の日蘭貿易史研究においては、日本側史料だけでは当然十分な考察をすることはできず、オランダ側史料と照合することによってその実態が解明される。さらに、オランダ船輸出品に関する研究においては、輸入された物そのものの実見・調査が重要な作業となってくる。輸入染織品に関しては、本報告で使用した「反物切本帳」がその点、貴重な情報を与えてくれる。また、商人作成の「見帳」は、反物とその取引に関する数多くの情報を提供する。そして、オランダ側の取引史料は各品目の産地・種類・輸入量・日本への販売量・価格等々の情報を与えてくれる。日蘭貿易の取引において、これら日本側史料・オランダ側史料・物史料が照合されることによっ

て、その実態が詳細に解明され、当時の日蘭関係にかかわる歴史事象の分析・研究の基礎をもさ
さえていくものと考えられる。日蘭貿易史研究だけでなく、広く日蘭関係史の研究において日本
側の史料と共にオランダ史料の活用とその照合は重要な基礎的作業であり研究といえるのである。

註

- (1) 「反物切本帳」には、反物目利作成のものど商人作成のものがある。反物目利作成のものは、反物
目利が輸入反物を鑑定した後、後の評価、および覚えのために作成した「手本帳」と称すべきもので
あり、商人作成のものは長崎会所と商人との取引の実態を伝え、取引された裂見本と共に商人の落札
価格まで知ることができるものである。
- (2) 拙著『日蘭貿易の史的硏究』（吉川弘文館、2004年）174～182頁参照。
- (3) 小笠原小枝・石田千尋「紅毛船・唐船・琉球産物 端物切本帳について」（『MUSEUM』456、1989
年）16頁参照。
- (4) 山脇悌二郎『事典 絹と木綿の江戸時代』（吉川弘文館、2002年）144頁参照。
- (5) Frieda Sorber, *Vlaanderen-Nederland: Een wisselwerking in katoendruk*. "Katoendruk in
Nederland" Den Haag, 1989. p.43. また、ヨーロッパ製の更紗は、オランダ以外にイギリス・ドイ
ツ・フランス等で生産された可能性がある。(Ebeltje Hartkamp-Jonxis, *Sits en Katoendruk, handel
en fabricage in Nederland*. "Sits, Oost-West Relaties in Textiel" Den Haag, 1987. pp.36-38.)
- (6) 「見帳」は商人が取引商品に関して、荷見せ時点から落札時までを記録したものであり、そこには
各商品の名前・数量・寸法・特色、および入札上位三番札までの価格と商人名が記されている。
- (7) 岩本裕『インド史』（修道社、1956年）156～159頁参照。西村孝夫『インド木綿工業史』（未来社、
1966年）136頁参照。浅田實『東インド会社』（講談社、1989年）200～201頁参照。

[付記1] 本稿で掲載した写真は各所蔵館の許可を得た。御許可頂いた早稲田大学図書館・金沢市立図
書館・長崎県立長崎図書館・東京大学史料編纂所に感謝申し上げます。また、図10・11は拙著
『日蘭貿易の史的硏究』（吉川弘文館、2004年）より転載した。

[付記2] 本稿は、平成17年度文部科学省研究費補助金特定領域研究（2）による成果の一部である。